

複合的分断と法

——特集の趣旨

尾崎一郎

近時、様々な文脈において社会の「分断」が語られている。今回の特集では、複数の要素の相互作用によってもたらされる複合的分断の深化を現代社会の特徴と捉え、分断がもたらす多様な問題への法的応答の可能性と限界を考える。

1 複合的分断とは何か

本稿が注目する社会の複合的分断とは何であるか。3点にわけて整理しておく。

(1) 分断の深化と可視化

社会の分断の深化とは、何らかの要素を基準として当該社会が複数の集団に分かれ相互に対立しており、しかも集団間の格差が拡大し対立も深まっているということを意味する。すなわち、集団間で財や権限・権利の配分、社会的地位・役割が異なるという状態が固定化しており、しかもその差異は——不利な条件にある側から見れば、あるいは基本的人権の観点からすれば、到底正当化できない程度にまで——拡大再生産している。

そして、このような客観的格差が存在することに加えて、当該格差や差異が集団間における彼我の区別として認識され表象されていることが重要である。それは集団を属性で弁別する一般的な分類（以下では「カテゴリー」と呼ぶ）と連結してしばしば語られる。例えば、性差（「男」「女」）、雇用形態（「正規」「非正規」）、シチズンシップ（「国民」「外国人」「特別永住者」「無国籍者」「移民」「難民」「先住民」）に関わるカテゴリーである。

このような表象にはいくつかの重大な機能がある。第1に、集団間の区別と対立を可視化し意識させる。第2に、性差のように分類が生得的なものとして観念されやすい場合特に、カテゴリー間の非互換性、すなわち、差異の「本質」性が暗示さ

れ、こうした差異が固定的で不変なものであることを印象づけ、意識に定着させる。第3に、差異と分類の因果関係を逆転させる。すなわち、差異があるから分類するのではなく、カテゴリーが異なるから異なる財の配分や役割分業や差別的取扱いが自然かつ正当であると解されがちになるのである（実際には循環的關係にある）。

以上のように集団間の格差や権利差や役割分業が集団の自己同定や彼我の区別を含むカテゴリーによる分類と連動して表象される時、そこには差別や排除の暴力、そして集団間の憎悪／対立感情、また、集団内での意見の極性化（polarization）や内部的抑圧が、しばしば相伴う。社会全体としてみると、コミュニケーションが遮断され、一体性が希薄化し秩序が混乱することに繋がる。法的応答が必要な問題がそこに発生する。

(2) 複合性

現代社会における分断の問題を複雑にしているのは、その複合性が顕著であるということである。すなわち、社会に分断をもたらす要素が多様に存在する。人間の身体性や生得性に近いと観念されている（それ自体が争点であるが）ものから順に列挙するなら、①性・性指向、②人種、③障害、④民族、⑤信仰・信教、⑥階層・階級、⑦学歴、⑧雇用形態、⑨地域（都鄙格差）、⑩国籍、⑪思想・イデオロギー、⑫支持政党、などを指摘できるであろう。考えようによっては「世代」も挙げることもできるかもしれない。

これらの多様な要素は相互に作用しあい、重なり合い、分断の様相を複雑化している。例えば、正規雇用労働者と非正規雇用労働者の分断が、外国人労働者差別や女性差別の問題と重なり合い、対応を難しくしている。ある要素においては「弱者」である者が他の要素においては「強者」とな

り「弱者」を排除したり抑圧したりすることも起こり得る。非正規雇用の若年男性が、職場や地域における移民排斥や女性差別に加担するというようなケースである。一方で、「地方」に就労ビザのない「不法滞在」者として居住し男性顧客やブローカーから搾取され暴力を恒常的に受けている、「貧困層」出身の接客業「外国人」女性のように、幾重もの要素による脆弱性を一身に纏ってしまっているような人も存在する。これらの問題を単一の要素の問題に単純化し十把一絡げにして論じてもしばしば核心を射抜くことは出来ない。

(3) 社会秩序の混乱

複合的分断には、先にも述べたように、差別や暴力、排除、憎悪といった現象が伴っている。何らかの要素において「マイノリティ」や「他者」「よそ者」と目される人々（集団そのものである場合も個人である場合もある）へ向けられるヘイト・スピーチやヘイト・クライムやハラズメントはその代表的なものであるが、欧米諸国で見られるような「貧困地区」たる「郊外」／「インナーシティ」の「人種マイノリティ」や「移民」や「宗教的マイノリティ」による「暴動」や「テロリズム」なども複合的分断と深く関わっている。

また、このような意図的になされる暴力や排除、敵対行動とは別に、無意識のうち人を分類し異なる扱いを正当化する認知的バイアスや構造的不平等の問題も格差や差別を考える上で欠くことができない。Lauren Edelmanが近著で指摘しているように¹⁾、性や人種に基づく差別やハラズメントを規制する内規や問題処理手続を整備している職場でもなお（あるいはそうであるがゆえにかえて）構造的差別や権利侵害の問題が見逃されしばしば個人の能力差の問題に還元されて正当化されさえするという問題である。分断線を挟んで不利な側にいると自認する集団は、こうした構造的不平等、認知的バイアスの問題に敏感であり、相手方の無自覚さに対する苛立ちを覚え、時に包摂への希望を捨て去り憎悪や分離行動へと反転することになる。

さらに、分断をもたらす格差や差異は世代を超えて再生産される。経済格差（貧困）の再生産、

それと深く関わる学歴格差の再生産は日本でも指摘される。諸外国でも、例えば郊外（フランス）やインナーシティ（アメリカ）の貧困地区に集住している移民や人種マイノリティの経済社会からの排除の継続と、ジェントリフィケーションを果たしたダウンタウンやゲイテッド・コミュニティに住む富裕層における富や文化資本の継承、そして「グローバル」に活躍する「エリート」という超地域的・国家的存在への変貌、さらには、地域や衰退産業に束縛されて状況の悪化を座視するしかない消え行く中間層（例えば、「ラスト・ベルト」のトランプ支持者たち²⁾）の孤立などは、まさに格差が固定化し、人々を相互に分断し敵対させていることの象徴的な現れとみなすことができる。

こうした分断と混乱は、社会の構成員における一体感の希薄化を伴うであろう。すなわち、分断線の彼我を区別し表象することを通じて、同じ社会の構成員としての連帯感は失われ、むしろ異なる社会（まさにカテゴリー）に帰属する関係として認知されるようになる。ジョック・ヤングが指摘するように、それは相互の排除（あるいは住み分け、接触の拒否、せいぜいが相互の無関心による表面的な受容）をしばしばもたらす（segregation）³⁾。要するにお互いに「別世界」に生きるようになるのである。それぞれの「世界」では、外部や社会全体についての偏見を強化するような偏った情報が流布し、好まれる。また、内部では、逆に同質的な集団としての一体性を確認するための異物排除、内部的抑圧が強まることもある。文化的純一性や純粋性の名のもとに、多様な価値観や行動が抑圧され、他の要素による内部的分断を隠蔽さえする。こうした内部的抑圧は時として暴力を生む。これらの問題は、社会や国家に対する信頼を根本的なところで毀損する。

2 応答の困難さ

以上整理したような複合的分断の現象は、その特性故に応答が困難である。

(1) 相乗と転移

まず、社会に分断をもたらす複数の要素が相互

1) Lauren B. Edelman, *Working Law: Courts, Corporations, and Symbolic Civil Rights*, The University of Chicago Press, 2016.

2) 金成隆一『ルポ トランプ王国——もう一つのアメリカに行く』(岩波新書、2017年)。

3) ジョック・ヤング『排除型社会』(洛北出版、2007年)第7章。セネットを引きながら次のように指摘する、すなわち、人々は「無関心な態度によって差異を受容」するが、「敵意を帯びた無関心がちょっとしたことで激しい敵意となって表面化し、文化的他者が悪魔に仕立てあげられる条件がつくりだされるのだ。」(428頁)